

- 宇和島圏域では水田の有効利用・高収益作物としてさといも栽培に取り組んでおり、「サトイモ疫病」の未発生地域である管内は、県内各産地への種芋供給基地としても期待されている。しかし、栽培技術が未熟なことや安定した種芋の生産・供給体制の確立などが課題。
- 南予地方局では平成30年度から「宇和島圏域水田さといも生産振興協議会」を設立し、生産技術の向上や種芋の安定生産に取り組んだ。
- その結果、栽培面積、生産者数が増加するとともに、ニーズに応じた種芋を生産・出荷することができた。

具体的な成果

1 産地の拡大

- 県、JA、各市町等の関係機関が連携して、さといもの産地化を推進。栽培面積や生産者数が増加し、産地が拡大。

- ①栽培面積 H30:3.4ha→R4:10ha
- ②栽培者数 H30:28人→R4:52人

2 生産性の向上

- 栽培意欲及び栽培技術が向上し、単収がアップした。
- 集落営農組織の機械導入(さといも分離機)を支援し、省力化を図った。

①単収の向上

H30:0.7t/10a →
R4:1.5t/10a

②作業性の向上

作業時間が1/3に軽減



3 優良種芋生産技術の確立と普及

- 親芋の副芽を利用したセル苗増殖技術を実証し、農家及びJAが技術を習得。
- ビニールハウスでの種芋貯蔵で腐敗率が大幅に低下した。
- 「サトイモ疫病」発生防止対策として、ほ場内に防除通路を設置。作業の効率化及び薬剤の付着率が向上した。

種芋出荷量 H30:0.7t→R4:17t



普及指導員の活動

1 生産振興協議会の開催

- 普及組織が中心となり、さといも生産部会長、JA、県農林水産研究所、管内の市町を構成員とする協議会を設置。
- 栽培における問題点を踏まえた実証ほの検討や、今後の生産振興方策について、生産者や関係機関と意識統一。

2 技術指導と省力作業体系の推進

- 様々な情報を収集し、地域に適した栽培方法を見出すとともに、個別巡回指導及び栽培講習会等により、各生産者の技術力向上に努めた。
- 県農林水産研究所と連携し、栽培技術の省力化に向けた高性能機械の実演会を開催。

3 優良な種芋生産の技術確立

- セル苗による種芋生産や腐敗低減対策等の実証ほを設置。実証結果を栽培講習会や生産振興協議会で生産者及び関係機関に情報共有し、栽培指針に反映した。

普及指導員だからできたこと

- ・生産者や関係機関との連携を密にとることで意識統一が図られ、新規栽培者の確保や栽培面積の拡大、ニーズに応じた種芋の生産及び出荷体制を確立できた。
- ・専門的な視点から、効果的な実証ほの設置や結果の分析ができ、地域に適した栽培技術指導につながった。

愛媛県

さといも産地の育成と種芋供給体制の確立に向けて

活動期間：平成30年度～令和4年度

1. 取組の背景

宇和島圏域では早期米を中心とした水稻栽培が盛んであり、水田の有効利用・高収益作物としてさといも栽培に取り組んでいる。また、サトイモ疫病の未発生地域であることから、県内各産地への種芋供給基地としても期待されている。しかし、先進地と比較して栽培技術が未熟なことや、安定した種芋の生産・供給体制の確立等が課題となっている。

そこで、生産技術の向上や機械化の推進によるさといも産地の育成及び優良種芋の安定供給体制の確立を図る。

2. 活動内容（詳細）

(1) 宇和島圏域水田さといも生産振興協議会の設立

普及組織が中心となり、生産部会長、JA、県農林水産研究所、市町を構成員とする生産振興協議会を設置し、新規栽培者の確保や生産技術の確立、省力作業体系の推進等に関係機関が一丸となって取り組んだ。

(2) 栽培技術の平準化を目指した技術指導

生育調査や県内産地の情報を収集し、地域に適した栽培方法を見出すと共に、作業時期に応じた講習会や園地互評会の開催により、生産者の栽培技術や生産意欲の向上を図った。また、農林水産研究所と連携し、ハイクリアランス乗用管理機による土入れの実演会の開催等、高性能機械による省力化について生産者の理解を深めた。

(3) 優良種芋の生産に向けた技術実証

親芋の副芽を利用したセル苗による種芋生産技術や種芋貯蔵中の腐敗軽減対策として、ビニールハウスでの貯蔵実証を行い、現地での実用性を検討した。また、サトイモ疫病発生防止に向けた対策として、ほ場内に防除通路を設置し、その効果について検証した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 生産振興協議会の開催と生産拡大

協議会の開催により、管内の生産状況や栽培における問題点等を共有し、意識統一を図った。関係機関と連携して作付けを推進することで、栽培面積及び生産者数が増加した。また、課題を踏まえた上での実証ほの検討や今後の生産振興方策を決定した。

(栽培面積 H30：3.4ha→R4：10ha、栽培者数 H30：28人→R4：52人)

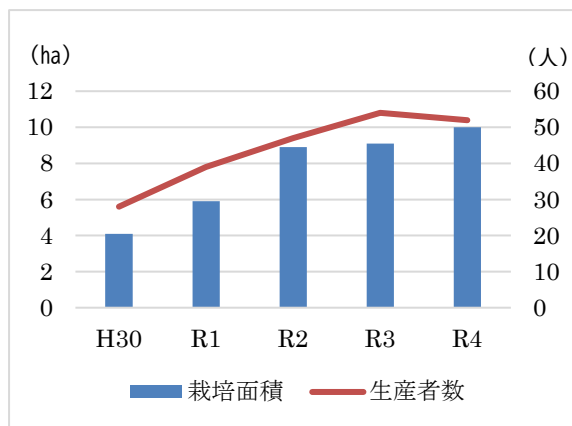


図 - 1 栽培面積と生産者数の推移



図 - 2 生産振興協議会での現地見学

(2) さといも生産技術の向上

栽培講習会や個別巡回指導により、適期作業の重要性を生産者が理解し、栽培技術及び生産意欲の向上につながった。また、省力作業体系を推進した結果、集落営農組織が県の補助事業を活用し、さといもの分離機を導入したことで、作業時間が約 1/3 に短縮された。

(3) ニーズに応じた種芋生産

・優良種芋増殖技術の実証

通常は利用しない親芋の副芽からセル苗を作成することで、健全な苗を大量に確保することが可能となる。実証の結果から、効率的に種芋を増殖できることが確認された。作業研修を通して JA 及び生産者が技術を習得した。



図 - 3 副芽の切り出し作業



図 - 4 セル苗



図 - 5 本ぼへ定植

・種芋保管技術の実証

種芋出荷開始までの貯蔵期間において、通常の露地貯蔵では寒害による腐敗のリスクが高いことからハウス貯蔵の有効性を検証した。その結果、露地貯蔵では約 3 割が腐敗したが、ハウス貯蔵での腐敗はほぼ確認されなかった。



図 - 6 露地での種芋貯蔵



図 - 7 ビニールハウスでの種芋貯蔵

・サトイモ疫病発生防止対策

ほ場内に防除通路を設置した実証では、作業の効率化が図られるとともに、ほ場内に入って防除が可能となることから、薬剤の付着率向上にもつながることが分かった。栽培指針にも反映し、通路設置について広く周知した。

これらの取り組みにより、種芋生産農家の増加や新たな技術の習得等もあり、ニーズに応じた種芋を出荷することができた。

(種芋出荷数量 H30 : 0.7 t → R4 : 17 t)

4. 農家等からの評価・コメント

宇和島市三間町さといも生産者 Y氏

土地利用型の作物を探すなかで、県内のさといも産地に視察に行った際、粘土質で水はけの悪いほ場条件の宇和島でも栽培できると感じ、栽培を始めた。水田の輪作に向いていることや単価が安定していること、収穫期間が長いこと、労働力の分散が可能なこと等に魅力を感じている。栽培を始めて数年が経過したが、単収が伸び悩んでいるため、徹底的な管理作業により単収の向上を目指していきたい。また、管内は種芋産地としての役割を担っていることから、今後も安心して任せてもらえるような産地づくりを目指していきたい。

5. 普及指導員のコメント

南予地方局農林水産振興部農業振興課地域農業育成室

技師 伊達 志穂美

県下全域でさといもの生産拡大が進む中、管内においても栽培面積及び生産者数が大きく増加した。講習会や巡回指導により栽培技術は向上したが、管理に個人差があることや早期米地帯における水利の問題により、現状の平均収量 1.5t/10a は県内他産地と比較しても低いことから、今後は単収の向上に力を入れていきたい。また、優良種芋の生産技術について、実証ほの設置により、高品質な種芋生産技術が習得できたため、今後はそれらの普及・定着を図る。

6. 現状・今後の展開等

関係機関との連携によりさといもの栽培を推進した結果、産地として大きく成長した。しかし、単収が低いことに加え、安定的な種芋を生産・出荷していくためには正品率の向上が課題として残っている。そこで、高単収に取り組むモデル農家の育成や早期米地帯向けのマニュアル作成などにより単収の向上を図る。また、セル苗による種芋生産技術の確立や有効な種芋貯蔵方法への誘導により、正品率向上を目指す。今後も生産技術の指導や実証ほ設置による試験を行い、産地の維持・拡大につなげていきたい。